

# ココロにサプリ

広報メディア研究所代表 上野 弘子

第117回

節目の年に



大富豪であり、南蛮美術の収集家として知られた池長 孟<sup>はしめ</sup>が自身のコレクションを展示する美術館として建てたものだ。

当時、流行していたアール・デコ様式を取り入れた洒落た建築で、15年に私立美術館として一般公開。その後、建物、美術品とともに神戸市に寄贈された。現在、美術品は市立博物館に収蔵。この建物は歴史的、文化的に価値のある文書や資料等を保存する文書館として平成元年に新たに開館した。

収蔵品の中には、神戸大空襲に関する物も多い。

その中から、被災した神戸市街の写真や市民が空襲にどのように対処しようとしていたのかを伝える貴重な資料を集めた企画展「都市と戦争」が11月に開催された。ご覧になられた方も多いと思う。

会場で、私は米軍が撮影した1枚の写真の前からしばらく離れることができなかった。

かった。

B-29のコックピットから撮影したと思われるモノクロームの写真。そこには、神戸港に向けて落とされていく、いくつもの焼夷弾と空爆を受けて黒煙をあげる市街地がリアルに写っていた。

軍需産業、情報などの拠点に狙いを定め、次々と爆弾を落としていく。上空を



神戸市文書館「都市と戦争」に展示されていた6月5日の神戸空襲の写真 アメリカ国立公文書館所蔵

飛ぶパイロットには、地上を逃げ惑う市民の姿も叫び声も届くことはなく、想像する力もなかったのだらう。だからこそ、空爆の様子をカメラに収める冷静さが



Paris nov.2015

あったのだと思う。

神戸は掌握されていた。バケツリレーの訓練など何の役にも立たない。「現状を知らないこと」「知らされないこと」の恐ろしさ、ひしひしと伝わってきた。

わが国は、今年、戦後70年という節目の年を迎えた。しかし、それはわが国に限らず、第二次世界大戦を経験したすべての国にとって同様であり、特に海外ではナチスを取り上げた映像作品が何本も公開された。見心えがあったのは「黄金のアデーレ 名画の帰還」(ギャガ配給)と「顔のないヒトラーたち」(アット・エンターテイメント配給)。これまでにないアプローチで戦後を取り上げ、戦争の悲惨さと理不尽さ、そして平和の大切さが身にしみた作品でもあった。

今、この原稿を書いている最中に、速報が入った。パリ市内の6カ所でイスによる同時多発テロが勃発したという。

一報をインターネットのニュースで

知った私は、すぐにCNNにチャンネルを合わせた。週末のレストラン、サッカー場、コンサート会場等を狙った無差別攻撃。凶弾が多くて市民の未来を奪った。目的はシリアへの空爆への報復。フランスのリーダーはただちに声明を出し、報復を誓った。ローマ教皇は、この事件は第三次世界大戦の一部であると語ったと言った。

9・11以降、この世界は報復の連鎖、憎しみの連鎖が止まらなくなってしまった。

平和を願う人は多いはずなのに、平和を手に入れるためにはどうしても戦いが必要なのだろうか。

戦いが起きているのは、果たして社会に不満もっている人々だけなのだろうか。70年前に比べて情報の量は圧倒的に増えたが、真実はどこまで伝えられているのか疑問だ。